

面接法を用いた集団構造の把握

—ソシオメトリック・データとの比較による信頼性・妥当性の検討—

石田靖彦

学校教育講座 (心理学)

Interviews on social structure within classroom

Yasuhiko ISHIDA

Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

問題と目的

集団構造の把握には、Moreno (1942) によって開発されたソシオメトリック・テストが、古くから用いられてきた。これは、個々の成員に対する選択・排斥を当事者本人に直接尋ねるという簡便な手法であるが、それをソシオグラムやソシオマトリックスに要約することで、人気児や孤立児、下位集団の数、集団間の関係などを視覚的に把握することが可能となる。

田中 (1975) は、幼児から成人に至るまで、数多くのソシオメトリック・テストを実施した。そして、集団の発達段階には、「さぐり」「(集団) 同一化」「集団目標の生成」「集団規範の生成」「内集団と外集団の形成」「集団の雰囲気生成」「役割と地位の分化」の7つの段階があることを指摘した。また集団の類型に関して、統一結合型、分団結合型、一部集中型、分団分離型、多数分離型の5つの類型に分類しうることを示し、集団が未発達な場合や成員の年齢が低い場合には、一部集中型や多数分離型が多くみられ、集団が発達した段階や成員の年齢が高い場合には、統一結合型や分団結合型が多くみられることを指摘した。

近年では、蘭・武市・小出 (1996) が、「探り合い」「対立・葛藤の克服と集団の基礎づくり」「学級のアイデンティティの確立」「相互啓発」という4つの段階からなる学級集団の発達過程モデルを提唱し、事例検討的な分析を行っている。しかし、これら集団の発達過程やその類型化は、経験や実践の中から導出された側面が強く、必ずしも実証的データに裏打ちされているとはいえない。

狩野ら (狩野, 1985; 田崎・狩野, 1985) は、ソシオグラムなどの従来の手法が、集団構造の要約に関して明確な基準をもっていないことを指摘した上で、ソシオメトリック・コンデンセーション法という手法を提案した。これは、グラフ理論の要約手法を、ソシオメトリック・テストに適用したもので、集団の大局的

な構造把握に優れているという。楠見ら (楠見, 1986; 楠見・狩野, 1983) は、中学生の学級集団の推移を、このソシオメトリック・コンデンセーション法を用いて分析した。その結果、男子は中心と周辺が明確で、多くの成員間につながりのある集中度の高い構造を示すのに対し、女子はつながりの弱いサブグループに分かれた構造を示すこと、さらに男子の集団は、時間経過に伴ってより集中度の高い構造へと変化するのに対し、女子ではほとんど変化しないことを明らかにした。一方、大橋ら (1982) は、中学新入生の学級集団を追跡的に検討し、弱いネットワーク構造からサブグループが構成され、さらに高水準のネットワーク構造へと変化を認めたものの、その変化は決して直線的なものではないことを指摘した。

ところで、集団構造の把握手法として、長年用いられてきたソシオメトリック・テストは、児童・生徒への影響やプライバシーなどの観点から、実施が困難になりつつある。それに代わる手法として、教師による児童・生徒の関係評定や、研究者による行動観察なども行われている。しかし、教師が児童・生徒間のすべての関係を把握しているとは限らないし、研究者による行動観察も観察場面や観察時間の制約があり、得られた結果が本当の関係を反映している保証はない。児童・生徒間のインフォーマルな関係を把握するには、やはり集団に所属する児童・生徒による評定や報告が望ましい。

Cairns, Perrin, & Cairns (1985) は、このような方法論的な問題に関して、面接法を用いた手法を提案している。これは、それぞれの児童・生徒が認知した学級内の友人関係や仲間関係を語ってもらい、それを集約する手法で、以下のような利点がある (Cairns, et al., 1985; Kindermann, McCollam, & Gibson, Jr., 1996)。

第一に、対象とする評定者は数人でよく、すべての児童・生徒に調査を行う必要がない点である。しかも、

評定者は児童・生徒であるために、教師による評定や研究者による観察に比べて高い信頼性を保証できる。第二に、それぞれの評定者が認知した集団構造を、相互に比較することで、評定者の認知のゆがみを検討しうる点である。学級内の関係をもっともよく知っている彼らといえども、その正確さや認知の程度には個人差がある。その個人差を検討することは、彼らの集団に対する態度や適応状態を知る糸口にもなるだろう。

面接法を用いた集団構造の把握手法は、欧米では次第に認知され、それを用いた研究も報告されている(e.g., Cairns, Cairns, Neckerman, Gest, & Gariepy, 1988; Kindermann, 1993; Kindermann, et. at., 1996)。しかし本邦では、この手法を用いた研究はほとんど行われておらず、その有効性や問題点については明らかでない。

そこで本研究では、Cairnsらの面接調査を、中学新入生の学級集団に実施し、それとソシオメトリック・テストとを比較することで、信頼性や妥当性について検討する。さらに、学級集団を追跡的に調査することで、学級集団の推移についても検討を加える。

以上が本研究の目的である。

方 法

調査対象 愛知県内の中学1年生2学級の生徒80名(男子40名、女子40名)を対象とした。本学は同学区からの入学者が少なく、入学当初、ほとんどの生徒が面識がなかった。したがって、学級内の集団構造の推移を測定する上で有効な対象と考えられた。

手 続 き (1)4月下旬から5月上旬、(2)3月上旬から下旬の各時期に、以下の2つの調査を約1週間の間隔

をあけて実施した。

集団構造に関する面接調査：調査の目的と内容について説明し、対象者を募集した。調査の主旨を理解して応募してくれた生徒の中から、各学級10名(男子5名、女子5名)をランダムに選び、後日、個別に面接調査を行った。面接調査はあらかじめ作成したマニュアルに基づいて実施した。主な手続きは以下のとおりである。

(1)**仲間集団(グループ)の同定**：“クラスの中で、どんな人たちがよく一緒にいたり遊んだりしていますか。いつも一緒にいたり、よく遊んでいるの人たちの名前を書いてください。”という教示のもと、学級内に存在する仲間集団について、その成員(メンバー)をすべて記述してもらった。その際、記述する集団は同性についてであるが、異性も含まれる場合はその名前も書くこと、同じ生徒がいくつかの集団に所属している場合は、その名前を集団別に記入すること、集団に属していない人は書く必要がないこと、自分も集団に入っていれば自分の名前も書くこと、などを教示した。

(2)**仲間集団の特徴に関する自由報告**：仲間集団の同定に続いて、各集団の形成時期やその推移、形成のきっかけ、集団の特徴などについて、思いつくままに自由に報告させた。

ソシオメトリック・テスト：本研究とは異なる質問紙調査の一部に、ソシオメトリック・テストを含めてもらい、担任を通じて一斉に実施した。テストは記名法を用い、“同性のクラスメイトの中で、よく一緒に遊ぶ友だち”を4名を限度に記名させた。

結果と考察

関係マトリックスの作成

Table 1 各評定者が記述した集団数、成員数、および集団の平均成員数

	評定者	5月期			3月期		
		集団数	成員数	平均成員数	集団数	成員数	平均成員数
A組男子	Am1	4	3-7	5.0	6	3-9	5.2
	Am2	3	6-7	7.7	3	4-9	6.3
	Am3	5	2-7	4.8	6	2-8	4.3
	Am4	3	2-5	3.0	2	5-8	6.5
	Am5	5	4-5	4.4	3	4-9	6.3
B組男子	Bm1	4	2-6	3.5	4	4-6	4.5
	Bm2	6	2-5	3.3	5	4-8	5.0
	Bm3	4	2-4	3.3	5	2-7	3.6
	Bm4	3	3-14	7.3	6	4-7	4.7
	Bm5	4	3-11	6.8	4	5-11	8.0
A組女子	Af1	6	2-6	3.2	.	.	.
	Af2	5	4-9	5.2	4	3-7	5.3
	Af3	5	4-5	4.2	5	3-9	5.2
	Af4	5	3-5	4.0	3	5-8	6.7
	Af5	5	4-6	4.4	4	3-7	5.0
B組女子	Bf1	3	3-13	6.3	6	3-4	3.7
	Bf2	6	2-4	3.3	5	3-6	3.6
	Bf3	5	3-5	4.0	5	3-6	3.8
	Bf4	5	2-7	3.8	6	2-4	3.2
	Bf5	4	3-6	5.0	6	2-4	3.3

注) Af1は3月期欠席

面接調査において、評定者が記述した仲間集団の数、その成員数、および集団の平均成員数を算出した (Table 1)。仲間集団の数や成員数は、評定者によってかなりバラツキが認められる。このことは、“仲間集団”として認知し判断する基準が、評定者によって異なることを意味している。たとえば、すべての成員同士が仲良くなくとも、ある程度まとまりをもっていれば、それをひとつの集団とみなす評定者もいれば、それをいくつかの下位集団にわけて認知する評定者もいる。前者の場合、認知される集団数は少なく、成員数が多くなるのに対し、後者では、少人数からなる仲間集団が多く認知されるだろう。このことは、認知された集団数と平均成員数が、 $r = -.648$ (男子 = $-.471$; 女子 = $-.910$) と負の相関関係にあったことから裏付けられる。

このような個人差は興味深いですが、本研究の検討課題ではない。そこで、この影響を抑制するために、どの集団の成員かは不問とし、同じ集団の成員として挙げられた回数をすべての生徒ペアについてカウントし、それを要素とするマトリックスを作成した。これを「(評定者ごとの)関係マトリックス」と呼ぶ。さらに、各評定者の関係マトリックスを単純合計により合成し、「(評定者全体の)関係マトリックス」を作成した (Figure 1)。評定者ごとの関係マトリックスは、各評定者が認知した生徒間の関係の強さを表すが、それを集約した評定者全体の関係マトリックスは、評定者の個人差が相殺されており、生徒間の関係の強さに関する“客観的な”指標になる。したがって、これらの関

係マトリックス間のズレを検討することで、各評定者の認知の歪みや、評定者全体の関係マトリックスの信頼性を評価できる。

関係マトリックスの信頼性と妥当性

Cairns ら (1985) は、評定者間のズレの程度や信頼性を表す指標として、(1)同じ仲間集団に属する成員が、同じ仲間集団に属すると正しく評定された程度に関する Completeness Index (CI)、(2)同じ仲間集団に属する成員が、別の仲間集団に属すると評定された程度に関する Accuracy Index (AI)、(3)同じ仲間集団には属さない生徒が、同じ仲間集団に属すると評定された程度に関する Intrusion Index (II) という3つの指標を提案している。しかし、これらの指標には問題がある。それは、あらかじめ“誰がどの仲間集団に属するか”という評価基準が存在しなければ、これらの指標が算出できない点である。彼らは、“評定者の30%以上が同じ仲間集団に属すると評定した生徒を同じ仲間集団に属するものとする”という基準で仲間集団を同定し、上記の指標を算出した。しかし、これでは仲間集団の同定基準を変えることでそれぞれの指標も変わってしまう。そこで、本研究では、この段階での仲間集団の同定は行わず、関係マトリックスにおける評定者間の一致の程度、および各評定者の関係マトリックスと評定者全体の関係マトリックスとの一致の程度を検討することにした。

1. 評定者間の一致度

まず、各評定者の関係マトリックスについて、対応

評定者Aの関係マトリックス		生徒									
	A1	A2	A3	A4	A5	A6	...	A19	A20		
A1	-	2	1	0	0	2		0	0		
A2	2	-	2	1	0	0		0	2		
A3	1	2	-	0	0	1		1	0		
A4	0	1	0	-	1	0		0	1		
A5	0	0	0	1	-	1		0	0		
A6	2	0	1	0	1	-		0	2		
⋮											
A19	0	0	1	0	0	0		-	1		
A20	0	2	0	1	0	2		1	-		

評定者Bの関係マトリックス		生徒									
	A1	A2	A3	A4	A5	A6	...	A19	A20		
A1	-	1	1	1	0	2		2	0		
A2	1	-	1	0	0	0		1	1		
A3	1	1	-	0	0	1		1	0		
A4	1	0	0	-	0	0		0	2		
A5	0	0	0	0	-	0		0	0		
A6	2	0	1	0	0	-		0	1		
⋮											
A19	2	1	1	0	0	0		-	0		
A20	0	1	0	2	0	1		0	-		

評定者Cの関係マトリックス ……

単純加算

評定者全体の関係マトリックス		生徒									
	A1	A2	A3	A4	A5	A6	...	A19	A20		
A1	-	13	10	2	0	8		6	1		
A2	13	-	9	2	0	1		1	6		
A3	10	9	-	0	3	4		4	0		
A4	2	2	0	-	1	1		0	5		
A5	0	0	3	1	-	2		1	0		
A6	8	1	4	1	2	-		0	4		
⋮											
A19	6	1	4	0	1	0		-	5		
A20	1	6	0	5	0	4		5	-		

注1) マトリックスの要素は、同じ仲間集団に属すると評定された回数を示す。
 注2) 作成過程の詳細は、Kindermann (1993), Kindermann et al.(1996) を参照のこと。

Figure 1 評定者全体の関係マトリックスの作成過程

するマトリックスの要素を一对のデータとみなして、評定者間の相関係数を算出した。

評定者間の相関は、A組男子の5月期で $r=.524$ (レンジ.178~.889, 以下同様), 3月期で $r=.668$ (.380~.907), B組男子は5月期で $r=.331$ (.103~.674), 3月期で $r=.638$ (.398~.867), A組女子は5月期で $r=.712$ (.523~.885), 3月期で $r=.754$ (.602~.892), B組女子は5月期で $r=.561$ (.249~.837), 3月期で $r=.764$ (.520~.940)であった。学級や性別によって相関の高さは異なるが、全体的な傾向として、5月期よりも3月期の方が相関が上昇していた。これは、入学してからの期間経過にともなって、評定者が学級内の関係をより正確に認知できるようになったこと、学級内の関係が固定化し、仲間集団の境界が明確になったことを反映しているものと思われる。

次に、各評定者の関係マトリックスと評定者全体の関係マトリックスとの関連について、対応するマトリックスの要素を一对のデータとみなして、相関の高さを検討した。ただし、評定者全体の関係マトリックスには、当該の評定者の関係マトリックスの要素が含まれるため、評定者全体のマトリックスから当該の評定者の関係マトリックスの要素を除いた上で、両者間の相関係数を算出した。さらに、評定者全体の関係マトリックスの信頼性を評価するために、 α 係数を算出した。これは、評定者全体の関係マトリックスが、各評定者の関係マトリックスの単純合計である点に着目

し、前者を尺度、後者をその項目とみなして算出したものである。結果を Table 2 に示す。

各評定者の関係マトリックスと評定者全体の関係マトリックスとの相関は、5月期の Bm1, Bm3, Bm4, Bm5, および Bf1 を除いて、 $r=.40$ 以上の比較的高い相関が認められた。

Bf1 については、他の評定者の相関は高いことから、この評定者の認知が不正確であったと解釈できる。しかし、5月期のB組男子は、ほとんどの評定者の相関が低く、不正確な5名がたまたま評定者として選択されたとは考えにくい。むしろ、この時期では生徒間の関係が固定化しておらず、流動的であったことを示していると思われる。このことは、同じB組男子の相関が、3月期では $r=.550$ ~.774へと大きく上昇していることから裏付けられる。

評定者全体の関係マトリックスの信頼性は、5月期のB組男子でやや低い値を示したが、それ以外は $\alpha=.773$ ~.923と高い値が示された。それぞれの評定者の評定には個人差があるが、それらは相互に関連しており、それを集約した関係マトリックスは、比較的高い内的整合性を有するといえるだろう。

2. ソシオメトリック・テストとの関連

“同性のクラスメイトの中で、よく一緒に遊ぶ友だち”という基準において、相互に選択したペア(以下、相互選択と略す)を2点、一方が選択し他方は選択しなかったペア(以下、一方選択と略す)を1点、双方とも選択しなかったペア(以下、相互非選択と略す)を0点

Table 2 各評定者の関係マトリックスと評定者全体の関係マトリックスの相関

評定者		5月期	3月期
A組男子	Am1	.814 **	.717 **
	Am2	.454 **	.559 **
	Am3	.688 **	.753 **
	Am4	.414 **	.861 **
	Am5	.473 **	.762 **
	全体	($\alpha=.773$)	($\alpha=.879$)
B組男子	Bm1	.322 **	.550 **
	Bm2	.432 **	.728 **
	Bm3	.262 **	.774 **
	Bm4	.216 **	.653 **
	Bm5	.292 **	.702 **
	全体	($\alpha=.511$)	($\alpha=.840$)
A組女子	Af1	.671 **	.
	Af2	.717 **	.722 **
	Af3	.819 **	.747 **
	Af4	.787 **	.766 **
	Af5	.767 **	.814 **
	全体	($\alpha=.892$)	($\alpha=.889$)
B組女子	Bf1	.360 **	.732 **
	Bf2	.745 **	.887 **
	Bf3	.590 **	.835 **
	Bf4	.672 **	.755 **
	Bf5	.601 **	.802 **
	全体	($\alpha=.792$)	($\alpha=.923$)

注1) Af1は3月期欠席

注2) ** $p<.01$

Table 3 各評定者の関係マトリックスとソシオメトリック・テストの関係マトリックスの相関

評定者		5月期	3月期
A組男子	Am1	.577 **	.502 **
	Am2	.318 **	.594 **
	Am3	.560 **	.482 **
	Am4	.294 **	.630 **
	Am5	.529 **	.664 **
	全体	.620 **	.676 **
B組男子	Bm1	.406 **	.159 *
	Bm2	.664 **	.354 **
	Bm3	.388 **	.242 **
	Bm4	.196 **	.537 **
	Bm5	.354 **	.218 **
	全体	.624 **	.372 **
A組女子	Af1	.499 **	.
	Af2	.601 **	.630 **
	Af3	.822 **	.661 **
	Af4	.737 **	.569 **
	Af5	.724 **	.643 **
	全体	.796 **	.721 **
B組女子	Bf1	.293 **	.592 **
	Bf2	.693 **	.759 **
	Bf3	.591 **	.707 **
	Bf4	.549 **	.786 **
	Bf5	.517 **	.748 **
	全体	.685 **	.817 **

注1) Af1は3月期欠席

注2) ** $p<.01$, * $p<.05$

として得点化し、ソシオメトリック・テストによる生徒間の関係マトリックスを作成した。面接法による各評定者の関係マトリックスと、ソシオメトリック・テストによる関係マトリックスとの相関を Table 3 に示す。

各評定者の関係マトリックスは、多少のばらつきがあるものの、ソシオメトリック・テストによる関係マトリックスと正の相関関係にあることが示された。また、評定者全体の関係マトリックスと、ソシオメトリック・テストによる関係マトリックスは、B組男子の3月期 $r = .372$ を除いて、 $r = .620 \sim .817$ と高い正の相関が示された。以上の結果は、面接法を用いた手法の併存的妥当性を示している。

B組男子の3月期については、面接法の問題も考えられるが、本研究の場合は、むしろソシオメトリック・テストに問題があった可能性が強い。なぜなら、面接法による評定者全体の関係マトリックスは、高い整合性が示されていたのに対し ($r = .638; \alpha = .840$)、ソシオメトリック・テストではかなりの欠損値が生じていたからである。本研究では、ソシオメトリック・テストを実施するにあたって、記入したくない場合は記入しなくてよい旨を教示した。そのため、5月期では未記入者はほとんどいなかったが (1名)、3月期には、未記入・欠席などで8名の欠損値があった。この欠損値によって、ソシオメトリック・テストの結果がどの程度ゆがんでいたかは明らかでないが、少なからずの影響を受けているものと思われる。

ソシオメトリック・テストは、自分自身の関係について回答させており、高い信頼性と妥当性を有する優れた方法である。しかし、自分自身のことであるがゆえに、回答したくない被験者や欠席などで欠損値を生じやすい。面接法を用いた手法は、それを回避することが可能であり、そのような場合に有効といえよう。

学級内の集団構造の推移

最後に、面接法を用いた集団構造の把握例として、入学直後と10ヶ月後の集団構造を、評定者全体の関係マトリックスを用いて分析した。

ところで、仲間集団を同定する際にはいくつかの基準を設定する必要がある。ひとつは、仲間集団の境界をどこに設定するかという基準である。たとえば、集団内のすべての成員に関係があるわけではないが、数人の成員とは関係がある場合、その生徒を集団の成員とみなすかどうかといった問題である。ソシオメトリック・テストを用いた研究では、相互選択の人々をひとつの集団とみなし、さらにその集団成員と関係のある人を順次組み込んでいくという手法 (狩野, 1985; 田中, 1975) や、集団内の50%以上の成員と関係がある人を成員とみなすという手法 (Kindermann, 1993) などがある。本研究では、“すべての成員間に関係があ

る”という基準で仲間集団を構成した。この基準は、従来の同定基準に比べて厳しいものであり、仲間集団の大きさは小さく、集団数は多くなる傾向がある。しかし、仲間集団の重複のあり方やその推移を検討する上では、このような厳しい基準の方が有効と考えた。

仲間集団を同定する際の第二の問題は、どのような基準で、関係が「有る」あるいは「無い」と判断するかという点である。ソシオメトリック・テストの場合、二者関係の判断は、当該の二者のみに委ねられており、相互選択、一方選択、非選択の3段階しかない。しかし、本研究のように、複数の評定者からデータの収集が行われる場合には、何人の評定者が「有り」としたときに「有り」するのかという基準が必要である。Cairnsら (1985) は、評定者の30%以上が「有り」と評定した場合に「有り」とするという基準を用いているが、本研究の評定者数は Cairns らの研究にくらべて少ない。そこで今回は評定者の50%以上という基準を採用して分析した。

Figure 2 ~ Figure 5 は、上記の基準を用いて、学級、性別に仲間集団を同定し、その推移を図示したものである。

A組男子の推移： 5月の時点では、7人と5人の2つの大きな仲間集団が同定された。5人の仲間集団には、その成員の一部と関係をもつ2人の周辺成員がいた。それ以外の6人は、いずれの集団にも属していなかった。3月の時点では、8人、5人、4人、3人の4つの仲間集団が同定された。これらの集団に属する人の多くは、5月の時点でもいずれかの集団に属していた。しかし、成員の入れ替わりも多く、仲間集団の対応関係は明確には示されなかった。なお、5月の時点で集団に属していなかった6人のうち4人は、3月の時点でも集団に属していなかった。

仲間集団の特徴に関する自由報告では、それぞれの集団は、“サッカー”“カードゲーム”など共通した遊びを有していることが指摘され、遊びに応じて大きな集団になったり、小さな集団になったりと、流動的であることが指摘された。

B組男子の推移： A組の男子とは異なり、5月の時点で、2~4人の6つの小さな仲間集団が同定された。2人からなる集団を除いて、5つの集団には複数の集団に所属する成員が存在し、集団同士につながりが認められた。3人の生徒はどの集団にも属していなかった。3月の時点では、集団数はさらに増加し、7つの仲間集団が同定された。ひとつの集団は4人から7人へと成員を増やし、2つの集団は統合・離散して、4人の集団が新たに2つ形成された。小さな集団が多数存在しているが、その成員は複数の集団に属しており、集団同士につながりがあった。この時点では、集団に属さない生徒はおらず、すべての生徒がいずれかの集

団に所属していた。

自由報告では、部活が同じである集団もあるが、全体的に“カードゲーム”“ポケモン”“サッカー”などの遊びを中心に形成されていることが指摘された。

A組女子の推移： 5月の時点では、お互いにまったく関係をもたない5つの仲間集団が同定された。いずれの集団も4人からなり、集団に属さない生徒はいなかった。3月の時点では、2つの集団が統合されて8人の集団が形成された。他の3つの集団は統合・離散して、5人と6人の集団が新たに形成された。8人の集団と5人の集団には2人の周辺成員が存在し、双方の成員の一部と関係していた。6人からなる集団は、

他の集団とは独立していた。この時点でも、仲間集団に属さない生徒はいなかった。

自由報告では、仲間集団の成員は同じ部活に所属していることが多く、学校にいるときはいつも同じ仲間と一緒にいること、性格や考え方が似ている生徒同士が集まっていることなどが指摘された。

B組女子の推移： 5月の時点では、2～5人の6つの仲間集団が同定された。2つの集団には成員の重複がみられたが、その他の集団には成員の重複は認められなかった。3月の時点では、集団数は5つに減少したが、そのうち4つの集団は、5月の時点とほとんど同じ成員で構成されていた。なお、5月の時点では集

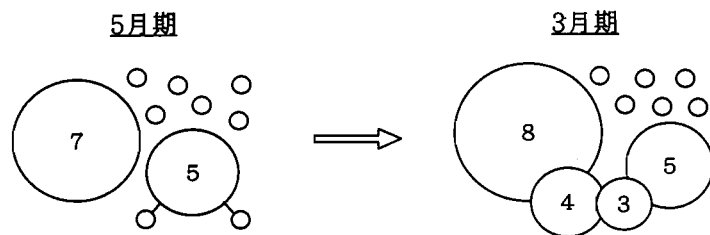


Figure 2 A組男子の集団構造の推移

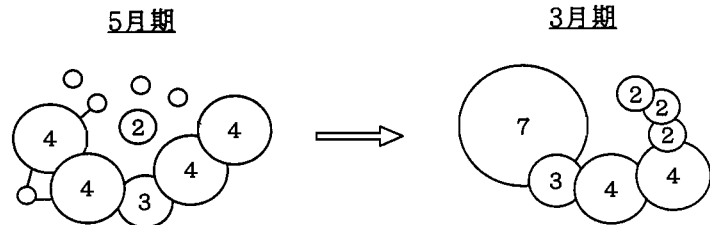


Figure 3 B組男子の集団構造の推移

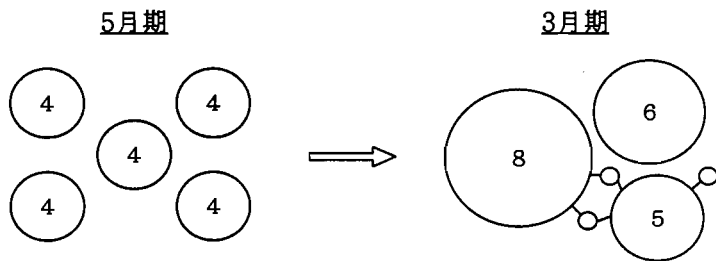


Figure 4 A組女子の集団構造の推移

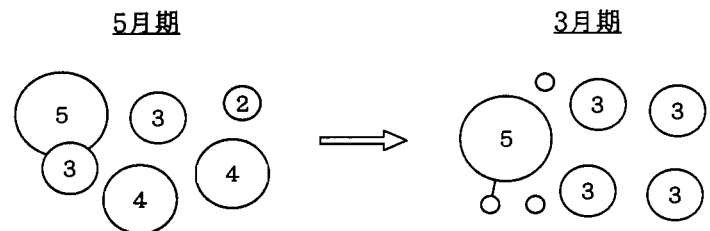


Figure 5 B組女子の集団構造の推移

団に属さない生徒はいなかったが、3月の時点では2人の生徒が集団に属していなかった。

自由報告では、同じ部活である仲間集団もあるが、多くは“アニメ”“アイドル”などの好みが同じであることが指摘された。

以上の結果をみる限り、集団構造の推移は、学級や性別によってかなりの違いがある。男子の集団はより集中度の高い構造へと変動するのに対し、女子の仲間集団は安定しており変動しにくいといわれている(楠見, 1986)。この指摘は、A組男子とB組女子ではあてはまるが、それ以外では明確でない。集団構造の推移や安定性は、性別の要因だけでなく、個々の生徒の特徴や教師の指導行動など、多くの要因に左右されており、一概にはいえないのかも知れない。ただし、集団の男女差については、いくつかの点を指摘することができる。

第一に、男子では複数の集団に所属する生徒が多く、集団同士がつながりをもっていたのに対し、女子の集団は相互に独立していた点である。同様の結果は、従来の研究でも指摘されており(楠見, 1986; 楠見・狩野, 1983; 大橋ら, 1982)、本研究の結果は、これらの知見と一致する。

第二に指摘できるのは、仲間集団の特徴に関する男女の違いである。男子は、仲間集団の特徴に関して、“サッカー”や“カードゲーム”などの遊びを指摘することが多かったのに対し、女子は、嗜好や性格の類似性を指摘することが多かった。また、男子の仲間集団は、状況に応じて変動するのに対し、女子は状況に関わらず、つねに同じ集団で行動していることが報告された。

このような仲間集団に関する男女の違いは、従来の研究でもしばしば指摘されてきた。たとえば、遊びの形態に関して、男子はスポーツやゲームなどの集団的な遊びを多く行うのに対し、女子はおしゃべりなどの非活動的で個別的な遊びを行う(Berndt, 1982; 住田, 1995)。また、友人選択の動機に関して、女子は男子に比べて親和的で情緒的な関係を志向する傾向が強く、相互選択に基づく凝集性の高い関係を形成する(Karweit & Hansell, 1983; 楠見, 1986)。つまり、男子では“何をするか”といった遊びや活動自体が重要な意味をもち、それを中心に集団が形成される傾向があるのに対し、女子では“何をするか”よりも、“誰とするか”といった情緒的なつながりが重視される。そのため、女子の仲間集団は、共通の嗜好や性格の類似性といった、より内面的な共通性や類似性に基づいて形成される傾向が強いのではないかと推察される。

結 語

本研究では、面接法を用いた集団構造の把握手法に

ついて、その信頼性と妥当性について検討した。学級内の集団構造は、評定者によって多少のバラツキがあるものの、それらは相互に関連しており、それを集約した関係マトリックスは高い信頼性を有することが示された。また、同時期に実施したソシオメトリック・テストとの間にも高い相関が認められ、併存的妥当性も有することが示された。Cairnsら(1985)は、面接法による集団構造の把握について、集団全体の50%以上の評定者数を推奨しているが、20名中5名という少ない評定者数であっても、比較的高い信頼性を維持できるといえる。

ただし、この手法にも問題点や留意すべき点もある。実施上の問題として、かなりの時間と労力を要するし、面接場所も確保する必要がある。これは、面接対象が少なくすむといえども、かなりの負担である。

また、児童・生徒への影響やプライバシーなどの倫理的な問題から解放されているわけではない。この点に関して、本研究では、あらかじめ目的と内容について説明し、希望者を募集するという方法を採用した。また、面接に際して、内容が他の生徒に知られることは絶対になく、答えたくないことは答えなくてもよいことなどを教示した。しかし、学級内の関係を意識化させることが、その後の関係に影響を及ぼす可能性は否定できない。面接対象者には丁寧なフィードバックを行うとともに、それ以外の児童・生徒に対しても教育的な配慮が必要である。単なる研究手法にとどまらず、それをういた教育的な実践への志向性が望まれよう。

引用文献

- 蘭千壽・武市進・小出俊雄 1996 教師の学級づくり 蘭千壽・古城和敬(編)教師と教育集団の心理 誠信書房 pp.77-128.
- Berndt, T. J. 1982 The features and effects of friendship in early adolescence. *Child Development*, 53, 1447-1460.
- Cairns, R. B., Cairns, B. D., Neckerman, H. J., Gest, S. D., & Garipey, J. 1988 Social networks and aggressive behavior: Peer support or peer rejection? *Developmental Psychology*, 24, 815-823.
- Cairns, R. B., Perrin, J. E., & Cairns, B. D. 1985 Social structure and social cognition in early adolescence: Affiliative patterns. *Journal of Early Adolescence*, 5, 339-355.
- Karweit, N. & Hansell, S. 1983 Sex differences in adolescent relationships: Friendships and status. In J. L. Epstein & N. Karweit (Eds.) *Friends in school: Patterns of selection and influence in secondary schools*. New York: Academic Press. pp.115-130.
- 狩野素朗 1985 コンデンセーション法による大局的集団構造特性の集約 実験社会心理学研究, 24, 111-119.
- Kindermann, T. A. 1993 Natural peer groups as contexts for individual development: The case of children's motivation in school. *Developmental Psychology*, 29, 970-977.
- Kindermann, T. A., McCollam, T. L., & Gibson, Jr., E. 1996

Peer networks and students' classroom engagement during childhood and adolescence. In Juvonen, J. & Wentzel, K. R. (Eds.) *Social motivation: Understanding children's school adjustment*. New York: Cambridge University Press. pp.279-312.

楠見幸子 1986 学級集団の大局的構造の変動と教師の指導行動, 学級の雰囲気, 学校モラルに関する研究 教育心理学研究, **34**, 104-110.

楠見幸子・狩野素朗 1983 学級集団の構造およびその変動: ソシオメトリック・コンデンセーションモデルの適用 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **28**, 45-51.

Moreno, J. L. 1942 Sociometry in action. *Sociometry*, **3**, 298-315.

大橋正夫・鹿内啓子・吉田俊和・林文俊・津村俊充・平林進・坂西友秀・廣岡秀一・中村雅彦 1982 中学生の対人関係に関する追跡的研究—センチメント関係と学級集団構造— 名

古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **29**, 1-100.

住田正樹 1995 子どもの仲間集団の研究 九州大学出版会

田中熊次郎 1975 新訂児童集団心理学 明治図書

田崎敏昭・狩野素朗 1985 学級集団における大局的構造特性と児童のモラル 教育心理学研究, **33**, 179-184.

謝 辞

本研究を行うにあたって、ご指導いただきました名古屋大学大学院教育発達科学研究科 吉田俊和教授に感謝いたします。また、調査・面接にご協力いただきました中学校の諸先生方、生徒のみなさまに感謝いたします。

(平成13年9月11日受理)